

# Glocal Tenri



10

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.10 October 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
“道”を伝える一求道と伝道  
／堀内みどり ..... 1
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (34)  
ニューヨークの日系人と天理教伝道⑤  
／尾上貴行 ..... 2
- ・ 日本語教育と海外伝道 (15)  
日本語教育での教授法について②  
／大内泰夫 ..... 3
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (13)  
悪魔的なもの—人間倫理の無力さと救い  
／金子 昭 ..... 4
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (19)  
仏典翻訳の歴史とその変遷②  
／成田道広 ..... 5
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (19)  
ライシテと医療④  
／藤原理人 ..... 6
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (6)  
2. コロンビアにおける日本人移民の話—その1  
／清水直太郎 ..... 7
- ・ 遺跡からのメッセージ (50)  
弥生時代を再考する④ 土井ヶ浜遺跡と渡来人論  
／桑原久男 ..... 8
- ・ ヴァチカン便り (40)  
個人主義に冒されるキリスト教徒  
／山口英雄 ..... 9
- ・ 思案・試案・私案  
天大生のSDGsに関する意識調査①  
／佐藤孝則 ..... 10
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 11  
第324回研究報告会(堀内みどり)／「国際比較神学会議2019(International Conference of Comparative Theology 2019)」に参加して(澤井真)／2019年度第1回伝道研究会(三浦尚仁)／2019年度公開教学講座の案内

## 巻頭言

### “道”を伝える—求道と伝道

おやさと研究所主任 堀内みどり Midori Horiuchi

8月7日、本年度第1回の「伝道研究会」がありました。これは研究所の研究活動の一環として、不定期的に行っているものです。今回は、アフリカにおける「世界救世教いづのめ教団」(教祖は岡田茂吉。以下、救世教)の様子を現地でフィールドワークをされている三浦尚仁さんに伺う研究会となりました(「おや研ニュース」の項の要約参照)。

三浦さんによると、救世教は、1955年(昭和30)からブラジル布教に着手し、そこで信徒となった人が、同じポルトガル語圏であるアンゴラでの布教を1991年(平成3)に始めました。そして、今では60,000人を超える人びとが信徒となっているということです。三浦さんは、日本から直接布教を始めたのではなく、同じポルトガル語圏のブラジルを通して布教が展開されたことが、まず、重要ではないかと指摘されています。また、しばしば行われる信徒の体験談発表が、信徒一人ひとりを自らの信仰の原点に立ち返らせ、それを発表するという過程で、信徒の信仰そのものが深化し定着し、そうした「語り」の積み重ねによって「日系宗教」という文化的枠組みを超えていっているのではないかと指摘されました。

自分がたすけられた体験が自らの信仰を形成していく元になっているということでしょう。

「おさしづ」は、

尋ねる時の心というは、いつへ生涯定めると言うなれど、速やかなれば、事情日が経ち、月が経ち、ついへ忘れる。(明治28年5月28日)

と論し、また、

一寸聞く。聞けば当分一時の処に治まる。なれど日経ち、月経てば忘れる。め

んへ勝手、めんへの理、事情で皆忘れる。(明治25年5月14日夜7時40分)とも教えられます。たすけられた時のその心は日々の生活の中で“忘れてしまいがち”であるなら、その時のことを繰り返し“話す”ということは非常に大切なことだと思います。

ところで、『天理教教祖伝逸話篇』は、次のような逸話を伝えています。

大和国神戸村の小西定吉は、人の倍も仕事をやる程の働き者であったが、ふとした事から胸を病み、医者にも不治と宣告され、世をはかなみながら日を過ごしていた。又、妻イエも、お産の重い方であったが、その頃二人目の子を妊娠中であった。(100「人を救けるのやで」)

教祖によって定吉はたすけられ、また、イエも無事に出産することができました。定吉は、その恩をどうしたら返すことができるのでしょうかと、教祖に尋ねます。教祖は、

「人を救けるのやで。」

と、仰せられた。それで、「どうしたら、人さんが救かりますか。」と、お尋ねすると、教祖は、

「あんたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」

と教えられました。真剣に自分の「救かった」話を伝えること、それは「はあと思たる芯の心忘れるに忘れられん。」(明治33年10月7日補)という、その人の信仰の元そのものです。こうして、自分のたすかりを伝えていくことが、自他共にたすかっていく・たすけられていくことになっています。

人を救けるというは、互いへの真の誠の理が人を救ける。又我が身も救かる救かる。(明治21年10月16日補)